

キリシタン時代・ 仏教徒受難の山

東光博英

2018年7月、「長崎と天草の潜伏キリシタン関連遺産」が世界遺産に認定された。17世紀に徳川幕府のキリスト教禁制により信仰の自由を奪われた日本人信者が、幕府の苛烈な弾圧のもと密かに信仰を継承し変容させつつ現代に至った長い辛苦の歴史がある。世界遺産の一つで、島原の乱の舞台となった原城跡は、長崎県島原半島の南部に位置している。そこからほど近い加津佐町の海岸に岩戸山と称する小山がある。ここは遺産に含まれていないがその歴史に深く関わる場所である。海岸に聳える山は一種異様な観を呈している。それも火山活動により生じた岩山と知れば合点がいく。今は樹木に覆われているとはいえ、国土地理院の地形図を見ると、標高96mの低山ながら東西に二つの頂を持ち、等高線は密に接して険しい。海に面する断崖絶壁の中腹に大きな洞窟があって「穴観音」と呼ばれる。この山には往昔、観音道場があって霊地として知られていた。日本がポルトガルと盛んに貿易を行っていた16世紀、島原半島は大名・有馬氏の領地であった。特に有馬晴信は、貿易の仲介者たるキリスト教の宣教師を招き、1580年に自ら受洗してキリシタンになると、宣教師の要請に応じて領内の40以上の神社仏閣を破壊して仏僧を追放、多数の領民を改宗させた。宣教師の記録によれば、その時仏教徒が多くの仏像を救い出し、人の近寄りたがたい穴観音に隠したという。そこで神父らは1582年、山に向かい、洞窟内にあった大小様々な仏像を焼却し、運び出せるものは教会に持ち帰って薪にした。実はその神父の一人こそ、かの著名なルイス・フロイスであった。彼は自らの体験を同年10月31日付のローマ宛年報に記しており、さらには後年、『日本史』第2部36章でも山の名をタイトルに掲げていっそう詳細に語っている。よほどその件が誇らしく思われたのであろう。両記録ともフロイスの手になるものだが比較すると異同がある。岩戸山は、前者ではIva (*Cartas de Iapão, Évora*) である一方、後者はYvandono (*Historia de Japam, v. III*) となっている。古名を岩殿山といったそうであるから、『日本史』のほうが正しく当時はイワドノと呼んでいたこ

とが窺える。また、穴観音に至る登山道はフロイスが「恐ろしくぞっとする」と言う通り、今でも滑落の危険が多く手を使わねば登れない。山麓の巖吼寺から登り始めて二つの頂の間を海側に越えると、そこから西峰の山腹を徐々に登りながら横断する。木々に覆われて景色は見えないが、獣道のような細く滑りやすい道と底知れぬ急斜面に不安が募る。そうして行き着いた所の岩の高い段差を上がると様子は一変する。フロイスは「岩山を回って登ると、最後にはその恐ろしい岩山が家の角のような一隅を形作っている所に行き当たり、下を見ると目がくらみそうになる。この角の反対側に洞窟がある」(拙訳)と説いているが、私は、彼が言う「家の角のような一隅」とはあの高い段差がある所だと確信した。『日本史』では、「三角形の一隅のような」と恐ろしさを強調した表現になっており、この部分に関しては年報のほうが正しいようだ。そこから先は岩の断崖絶壁であり、洞窟の入口直下まで一人がやっと通れるほどの狭い岩に刻まれた道が続く。山側の岩肌のコの字型の太い鉄の手掛かりが打ち込まれ、海側には鉄棒に鎖を通して柵のようにしているが、下をのぞくと足もとから切れ落ちていて、はるか下に海面が見える。入口直下は砂があって滑りやすくもっとも注意を要する。洞窟は奥行き20m、幅12mあり、天井も高い。多数の仏像を隠すには十分な広さだ。『日本史』の示す通り、地面には砂が堆積しており、恐らく当時からほとんど変わっていないであろう。ここはフロイスの足跡を直に辿ることができる貴重な史跡である。また歴史的には、宣教師のこのような行為と、有馬氏や大村氏などのキリシタン大名が各地で行った寺社破壊が禁教令の一因になったのは否めない。さらに、大村氏の領内では改宗を拒んだ阿乗と称する僧侶がキリシタンによって殺されている(『大村家秘録』)。後に幕府の迫害でキリスト教は多数の殉教者を出すことになるが、仏教側にも殉教者があったことを知るべきである。因みに、岩戸山に関して地元には、島原の乱の後、キリシタン狩りを逃れて穴観音に潜んでいた信者が役人に捕まったという伝承がある(『加津佐郷土史』)。これが事実なら、岩戸山は仏教・キリスト教双方にとって受難の場所であったと言えよう。

とうこう ひろひで

(非常勤講師 日本・ポルトガル交渉史)